めずらしい、とのことで早速ある教会が紹介されましたが、実現にはいたりませんでした。
東京で生まれ、育ち、東京しか知らなかった私の心に、なぜ東北地方があったかと申しますと、神学生時代、伝道実習のために四国の香長伝道圏に夏期伝道に派遣されました。そこで、土佐嶺南教会の楢本信篤先生との出会いがありました。その時から、私の心には「苗床教会への思慕」が芽ばえ、育ち、枝をはり、次第に大きくなって行きました。

日本の地方教会の置かれている現実と苦悩を、「苗床教会」という言葉は表現しています。それまで都会で育ち、都会の教会しか知らかなった私には、新鮮な響きでした。苗床が労苦し、育てた苗は、進学、就職、結婚のために、都会に移り、いつの日か都会の教会は、苗床教会の労苦の実りを豊かに受ける。苗床教会の貧しさが、都会の教会の豊かさを支えている。このような矛盾を抱えているのが苗床教会です。「苗床教会のために働きたい」。これが、いつしか私の祈りとなりました。

奇しき主の御導きによって、山形学院の宗教主任という務めが与えられ、同時に、兼務として、上山教会主任担任教師という務めが与えられて、長年の祈りが実現しました。

上山教会は昨年の統計を見ますと、十二名の群れで、礼拝出席平均が十一名でした。又、負担金は、約十万円でした。ここに、量ではなく質において確かな教会の群れがあります。しっかりと主を見上げ、主をのみ愛し、それ以上に主から豊かに愛されている兄弟姉妹の交わりです。主の生命に連なる時、小さな群れではありますが、豊かな慰めと、励ましをいただき、大いなる勇気に活かされるのです。

この地にあって思うことは、苗床教会の苦しみは、教会だけに留まらず、教会の置かれている地域社会の苦悩でもあるという発見です。教会は、自らの立つ地域と共に、その苦しみを担っているのです。そして、それは都市と田舎の対立という人類の歴史の中での、長年の課題でもあるのです。教会は、自らの立つ時代の中で、その時代と共に苦しみを負うているのです。

このような大きな課題を思う時、私も共に苦しみを負う者でありたいと願います。小さな群れではありますが、こ

の兄弟姉妹達が主に支えられて負い続けて来た重荷を、私も共に負う者とさせていただきたいと願います。その時、はじめて私は知るに値することを知ることがゆるされるのだ、と思います。

今、私の心に、「ナザレ」という場所が根をおろしています。神さまは、なぜナザレをお選びになったのか。神の御旨はどこにあったのか。そのことを問うことが、上山教会の今後の歩みに大きな意味を持っているように思うのです。